

土川平兵衛

天保義民祭

わたしたちのふるさとにいただく三上山のふもと、杉木立に囲まれた一角に天保義民碑があります。ふだんはひっそりとしているこの碑の前に、毎年10月になるとたくさんの人たちが集まります。

今から160年以上も前に起きた近江国（今の滋賀県）天保一揆の指導者たち、なかでも土川平兵衛の尊い生き方をしのぶ天保義民祭が行われるからです。

この天保一揆は、1842年（天保13年）10月、野洲郡（今の野洲市・守山市・近江八幡市の一部）、甲賀郡（今の甲賀市・湖南市）、栗太郡（今の栗東市・草津市・大津市の一部）に住むたくさんの人たちが、自分たちの生活を守るために命をかけて立ちあがった大事件です。



天保義民碑

若いころの平兵衛

そのころの日本を大きく揺るがすことになった天保一揆。その一番の指導者である土川平兵衛は、1801年（享和元年）野洲郡三上村に生まれました。

三上山を見上げながらたくましく育った平兵衛は、父や祖父がそうであったように、ふるさとの土や水の恵を受けて毎日農業に励みました。

1827年（文政10年）に父が亡くなると、平兵衛は26歳の若さで父が務めていた庄屋（村の代表）を引き継ぐことになりました。農業を営みながら村人たちの意見をまとめ、村の生活を守るために働く庄屋は、大変にいそがしく責任の重い務めでした。

しかし、平兵衛は村人たちのためには努力を惜しみませんでした。たとえ相手が武士であっても、村人たちの願いを訴え出しました。平兵衛の庄屋としての働きぶりには、三上村だけでなく、まわりの村々の人たちも感心しました。

また、平兵衛は勉学にも熱心に取り組みました。特に、中国の古典（古くからの書物）や、後に近江聖人といわれた中江藤樹の教えを進んで学びました。中江藤樹は、平兵衛よりも200年ほど昔に高島郡（今の高島市）に生まれ、世の中

のために正しく生きることの大切さを説きました。

天保の時代

平兵衛が生きた時代は、江戸幕府が国を支配していました。今とは違い、刀を持った武士が村人や町人の上に立って国を治めました。村人たちは力を合わせて米を作りましたが、せつかくとれた米の半分近くを年貢として武士に納めなければならぬ決まりでした。

また、そのころ米は今よりもずっと高い値段で取引されていました。江戸幕府は、全国から集めたたくさんの年貢米を元手にして政治を行いました。

しかし、江戸幕府十一代将軍徳川家斉のぜいたくな生活や外国船の警備に費用がかかり過ぎ、幕府のたくわえはなくなってしまいました。

1833年（天保4年）、平兵衛が32歳のときから数年間、大飢饉が起きました。洪水や冷害などのために、東北地方や関東地方を中心に米などの農作物がひどく取れなくなり、村人の家々から食べる物がなくなってしまいました。飢えや病気によって、おびたしい数の人たちが命を落としました。

大飢饉が起きても、幕府は武士の生活だけを守るような間違った政治を進めました。その結果、食べ物を求める人たちが、米屋や酒屋の倉にある米をうばう事件が次々と起きました。

さらに、1837年（天保8年）大坂（今の大阪市）で幕府の役人をしたことがある大塩平八郎が、飢えに苦しむ人たちと一緒に武器を持って幕府に逆らいました。この反乱は失敗に終わりましたが、大塩平八郎の死後、幕府の政治を正そうとする人たちが全国各地に現れることになりました。

見分の予告

江戸幕府の政治はいよいよ行き詰まってきました。米や金のたくわえが底をついた上に、大飢饉のために年貢米が十分に集まらなくなってきました。

1841年（天保12年）幕府の重要な役目にあつた水野忠邦たちは、幕府の政治を立て直すために少しでも多くの米を集めようとして、一つのくわだてをはかりました。それは、大飢饉からやっと立ち直り、けんめいに米を生産している村人の土地を見分しようというたくらみでした。

ところで、村人たちが納める年貢の量は、幕府があらかじめ検地という方法で全国の田畑を調べ、その広さによって決められていました。幕府が調べた田が

広ければ広いほど、武士にたくさんの米を納めなければならなかったのです。

見分は、村人が大変な努力をして新しく耕した土地だけでなく、耕すことができそうな空き地や荒地までも田畑として調べることです。つまり、見分を行うことで田の広さを多く数え、年貢米を増やそうというのが幕府のもくろみでした。

1841年（天保12年）11月、幕府は、草津川、野洲川、仁保川（今の日野川）沿いの375村の庄屋たちを京都の役所に集めました。

幕府の役人は、平兵衛をはじめたくさんの庄屋たちを前に言い放ちました。

「村の土地を見分することになった。この見分は幕府の命令であるから、決して逆らってはならない。」

突然の厳しい命令に、集まった庄屋たちは頭をかかえました。見分を許せば、村の人たちが生活に困ってしまうのは明らかでしたが、幕府の直接の命令を止められないことも明らかでした。

庄屋たちが悩み苦しむ中、この年の12月、水野忠邦たちは見分を行う役人の代表に市野茂三郎を選び、近江に行くように命令を出しました。

見分のからくり

明けて1842年（天保13年）1月11日、見分役人の市野茂三郎が約40人の役人を従えて近江に到着しました。

そして、1月19日から、野洲郡野村をかわきりに、江頭村、小田村、仁保村と仁保川をさかのぼるようにして見分を行いました。さらに、蒲生郡から野洲郡野田村まで約半年をかけて見分のために村々を回りました。

ただし、大きな城を持つ武士とかかわりのある土地は調べませんでした。幕府に文句が出にくい土地を選んで見分を行いました。

この半年間、市野たち見分役人のふるまいは、村人たちのことをまったく考えないといんでもないものでした。村人たちにぜいたくな食事を運ばせたり、たくさんの金を用意させたりしたのでした。

仁保川沿いの村人たちは、市野たちのふるまいがひどく身勝手なものであると分かっていたましたが逆らえませんでした。それは、市野たちのきげんによって、村の田畑の広さが変わることを村人たちが恐れたからでした。

市野たちは、村の土地をいつもていねいに調べたわけではなく、ときにはおよその見当で調べるといふ実にいいかげんな見分を行いました。

さらに、今回の見分にはとんでもないからくりが用意されていました。土地の

広さを測る一間のさおの長さは、昔から六尺一分（182センチメートル）という決まりがあるのに、市野たちのさおは五尺八寸（176センチメートル）しかありませんでした。このさおで土地を調べれば、実際よりも田畑が広がってしまうのでした。

見分役人が村の土地をすみずみまで調べたり、短いさおで調べたりしないように、村人たちは市野たちのきげんを取りました。仁保川沿いの村からもれるくやし泣きの声は、野洲川沿いの村人たちにも聞こえてきました。

仁保川沿いの土地見分を終えた市野たちは、近江最大の河川である野洲川沿いの村に近づいてきました。1842年（天保13年）6月25日には、野洲郡大篠原村にまで乗り込んできました。

平兵衛の決心

「どうすれば今回の見分をうまく止められるのだろうか。」

昨年11月の見分の予告から平兵衛は悩み続けていましたが、仁保川沿いの村での市野たちのふるまいを聞くたびに、平兵衛の悩みは一つの決心に変わっていききました。

「幕府の命令を止めるには、もはや一揆しかない。」

平兵衛は、野洲・甲賀・栗太の三郡のたくさんの村人たちが、心を一つにして、直接、幕府の見分役人に願いを申し入れることを考えました。

市野たちによる見分が少しずつ三上村に近づく中、平兵衛は昔から親しい間からで、甲賀郡そまなか杣中村の庄屋であるきのせぶんきち黄瀬文吉とその息子のへいざぶろうたず平三郎を訪ね、一揆の決心を語りました。

「村人たちの生活を守るために一揆を起こすつもりです。どうか力を貸してください。」

このころ、幕府に逆らって一揆を起こせば、一揆の指導者たちは死罪（死刑）になる決まりでしたが、黄瀬文吉も平三郎も平兵衛と同じ気持ちでした。

「今回の見分はあまりにもひどい。村人たちの生活を守るためなら、たとえ死罪になろうとも一いっしょ緒に一揆を起こしましょう。」

文字どおり命をかけるからには、大勢の人たちとともに一揆を起こし、必ず見分を止めさせなくてはならないと考えた平兵衛は、甲賀郡市原村の庄屋であるたじまじへえ田島治兵衛に相談をしました。

甲賀郡137村のまとめ役であった田島治兵衛は、平兵衛の強い決心に心を打た

れました。

「甲賀郡の庄屋たちを集めて、いっしょに一揆を起こすようにすすめましょう。もちろん私も死罪を覚悟^{かくご}して一揆に加わります。」

この年の夏から秋にかけて、三郡の各地で庄屋会議が何度も開かれました。

9月26日には、甲賀郡の庄屋たち約70名が水口宿（今の甲賀市水口町）に集まり、田島治兵衛の司会で一揆について話し合いました。

また、同じ日に野洲・栗太両郡の庄屋たち約60名が野洲郡戸田村（今の守山市立田）に集まり話し合いました。

庄屋会議での話し合いによって、平兵衛の決心はたくさんの庄屋たちに伝わり、三郡の村人たちの心を一つにしたのでした。



土川平兵衛石像

矢川神社のどよめき

1842年（天保13年）10月11日、野洲郡小篠原村での見分を途中^{とちゅう}で切り上げた市野たちが、とうとう三上村に現れました。

村から村への見分にさすがに疲れたのか、市野たちが三上藩の陣屋^{はんじんや}（武士の館^{やかた}）周辺に泊まって身体^{からだ}を休めている間に、平兵衛は一揆をうながす手紙を黄瀬文吉や田島治兵衛たちへひそかに送りました。

10月14日を告げる鐘^{かね}の音が月の輝く夜空にひびきわたると、それを合図に、甲賀郡森尻村^{もりしり}の矢川神社に村人たちが続々と集まってきました。夜明け前には、庄屋たちの計画どおり、一揆に加わる村人たちが矢川神社のまわりにあふれました。

東の空が明るくなり始めたころ、1万人をはるかに超える村人たちは、ほら貝^{ふえ}や笛、太鼓の音に合わせて、互いの決心を確かめ合うようにいっせいに声を上げました。村人たちのどよめきが朝の冷気^{つらぬ}を貫く中、熱気^おを帯びた一揆勢^{いっきぜい}が市野たちがいる三上山のふもとに向かって進みだしました。

三上村へ

矢川神社を出発した後も一揆に加わる村人たちが後^たを絶ちませんでした。一揆勢はどんどんその数と勢いを増しながら、野洲川に沿って三上村に向かいまし

た。

しかし、すべてが庄屋会議での打ち合わせどおりに運んだのではありませんでした。最初の計画では、すぐに三上村に入るのではなく、少しはなれた横田川原に一揆勢をとどめ、見分役人の出方を見る予定でしたが、勢いづく一揆勢を止めることはできませんでした。

さらに、途中で一部の一揆勢が、一揆に加わらない庄屋や酒屋の家を打ち壊^{こわ}してしまいました。日ごろの厳しい生活や武士中心の世の中への不満が暴力をふるわせたのでした。

この暴動を知った田島治兵衛をはじめ藤田^{ふじた}宗^{そう}兵衛^{べえ}や中^{なか}藪^{やぶ}喜^き兵衛^{へえ}などの主だった庄屋たちは、勢いづく村人たちに強い調子で声を上げました。

「今回の一揆のねらいは見分を止めることです。村の生活を守るために集まったのです。家を打ち壊しても問題は解決しません。」

平兵衛をはじめ一揆の指導者たちは、村の生活を守りたい一心でした。だからこそ、たとえ一揆であっても、だれかが傷つくような乱暴を認めるわけにはいきませんでした。

10月16日の朝、一揆勢が石部宿（今の湖南省石部）に着くと、約170人あまりの武士が待ち受けていますが、2万人を超える一揆勢の前では道をゆずるしかありませんでした。

16日の昼前、矢川神社から出発した甲賀郡の一揆勢は三上村に入りました。すでに到着していた野洲・栗太二郡の村人たちと合わせると、約4万人もの一揆勢が三上村をうめつくしました。三上村のあちらこちらでほら貝や太鼓や鐘の音がひびき、一揆勢のどよめきが三上山にこだましました。

この日、三上村の人たちは朝から総出^{そうで}で、腹をすかした一揆勢のために握り飯を作りました。

十万日の日延べ

おびただしい数の一揆勢を見て、市野の顔はこわばりました。自分の身が危^{あぶ}ないと感じたからでした。市野はふるえながら、三上藩の役人で平兵衛と親しい平野^{ひらの}八^{はち}右^え衛門^{もん}に、一揆勢と話し合うように命令しました。

平野は一揆勢の中に入って話を聞き、今回の見分を止^やめて欲しいという村人たちの必死の願いに深くうなずくと、村人たちと見分役人たちとの間を往^ゆき来^きしながら話し合いを続けました。

ところが、話し合いがまとまらないことにいらだったのか、勢いあまった一揆勢が市野たちの泊まっていた家に石やかわらを投げ込み始めました。もうそうになると勢いに火がついたかのように大勢の村人たちがその家になだれ込み、見分役人たちの持ち物やこれまでの見分の記録をこわしてしまいました。

市野はあわてふためいて三上山にかくれました。

「市野が山へ逃げるぞ。市野をとらえてこらしめよう。」

とさけんで後を追いかける村人たちもいました。

このまま暴力が広がることを恐れた平野は、残った見分役人たちと話し合い、一揆勢の願いを聞き入れた証文^{しょうもん}を一揆勢に差し出しました。さらに、別の役人が分かりやすく、『十万日、日延^{ひの}べ』（「今日から十万日、見分はしない」の意味）と障子^{しょうじ}に大きく書いて一揆勢に見せました。

すると、さわぎたてていた一揆勢は一瞬^{いっしゅん}静まり返ると、今度は喜びの声を上げました。願いがかなった喜びに涙を流す村人もいました。

いつのまにか、16日の夕方が近づいていました。一揆勢はそれぞれのふるさとに向かって、もときた道をたどり始めました。先ほどのさわぎがうそのように三上村はいつもの静けさを取りもどし始めました。

一揆の後

一揆勢の姿が見えなくなると、市野は三上山から降り^おりてきました。市野たち見分役人は残っていた荷物をまとめ、その日の内に京都の役所に向かって出て行きました。

決心を成し遂^とげた平兵衛は、一揆に加わった村人たちを誇^{ほこ}りに思いました。確かに乱暴がまったくなかったわけではありませんが、一人も命を落とすことなく一揆が成功のうちに終わったのは、三郡の村人たちのおかげであると感じていました。

しかし、この大事件がすべて今日で終わるわけではないことを平兵衛は知っていました。

一揆から間もない10月22日から23日にかけて、幕府は今回の一揆の指導者たちを捕^{つか}まえました。平兵衛をはじめ約130人あまりの村人たちが京都に送られて厳しい取調べを受けました。

12月16日、捕らえられた平兵衛たちは大津の役所に移されました。見分役人が一揆勢の願いを聞き入れたことや、市野たちの勝手なふるまいなどを認めたく

ない幕府は、縄なわで縛しばり上げた村人たちをここで拷問ごうもんにかけました。

皮がはがれ、肉が切れ、骨がくだけるほどの拷問を毎日のように受けましたが、一揆の指導者たちは、決して幕府の言いなりにはなりませんでした。すでに死罪を覚悟していた平兵衛は、むしろ、幕府や市野たち見分役人こそが間違っていることを訴えようとしました。

おぞましい拷問が続く中、捕らえられた村人たちは次々と命を落としていきました。いっしょに一揆を起こした仲間が幕府に殺されていくのを、平兵衛は血の涙を流しながら見つめました。

江戸送り

幕府は、生き残った一揆の指導者たちの内、平兵衛たち 11 人を極悪人ごくあくにんとして江戸（今の東京）へ送ることにしました。

1843 年（天保 14 年）3 月 4 日、罪人を運ぶ 11 ちょうの唐丸籠とうまるかごが役人たちに囲まれながら大津を出発しました。

翌日、唐丸籠が三上山に近い石部宿に入ると、極悪人にされてしまった指導者たちの家族や仲間が待っていました。

拷問でもとの姿が分からないほど変わり果てた平兵衛たちは、唐丸籠の中でしぼり上げられたまま、家族と最期の別れを惜おしみました。

石部宿を出てしばらくすると雨が激しく降ふってきましたが、野洲川沿いの道には、むせび泣く人たちが方々ほうぼうの村から現れて平兵衛たちを見送りました。

3 月 20 日ごろ、八ちょうに減った唐丸籠が江戸の役所に入りました。江戸への途中、3 人が力つきて命を落としたのでした。

江戸に入っても拷問が毎日のように続きましたが、平兵衛は最後の力をふりしぼって、市野たち見分役人の身勝手に不正なふるまいや、今回の一揆にこめられた村人たちの願いを訴えました。

平兵衛の必死の訴えに、江戸の役人は思わず聞き入ってしまうほどでした。

江戸へ入っても拷問が毎日のように続きましたが、平兵衛は最後の力をふりしぼって、市野たち見分役人の身勝手に不正なふるまいや、今回の一揆にこめられた村人たちの願いを訴えました。

江戸へ入って 1 か月あまり後、1843 年（天保 14 年）4 月 25 日、近江国天保一揆の一番の指導者である土川平兵衛は、ふるさとから遠く離れた牢屋敷はな ろうやしきの中で 42 歳の生涯を閉じました。

平兵衛とともに最期さいごの時まで幕府に訴えつづけた近江の村人たちもまた、生きて再びふるさとの地を踏むことはありませんでした。

幕府はすでに、見分失敗の責任をとらせるようにして市野たちを役人から追放

していましたが、改めて平兵衛たちの訴えをくわしく調べると、村人たちの言い分の正しさを認めないわけにはいきませんでした。

義民の心

平兵衛たちの死後も、幕府の役人は、今回の一揆に加わったり協力したりした人たちをさがし出しては罰ばつしました。平兵衛の残された家族にまで、野洲川の川原で肩や背中を打ちつけた後、家や土地をうばい、ふるさとから出て行くように命令しました。

しかし、幕府による今回の見分は取り止めになっただけでなく、二度と計画されることはありませんでした。平兵衛たちの文字どおり命をかけたたたかいが、幕府のたくらみをくだけ、村人たちの生活を守りぬいたのでした。

この天保一揆の様子は各地に伝わり、重い年貢に苦しむ国中の村人たちを勇気づけました。そして、村人たちのために尊い命をかけて幕府の政治を正した平兵衛たちを『天保義民』として仰ぎました。

村人たちの一揆を恐れて見分を行えなくなった江戸幕府は、やがて力を失い、この天保一揆から 25 年後に滅亡めつぼうしたのでした。

一揆勢が心をつにして三上村に集まった 10 月、野洲市や湖南市などでは天保義民祭が毎年行われています。平兵衛たち義民の生き方を語りつぎ、義民の心を受けつぐために。

そのころの日本を大きく揺るがし、ついには、長く続いた武士中心の世の中を滅ほろぼす原因になった天保一揆。その一番の指導者である土川平兵衛は、江戸送りの唐丸籠の中から、正義を貫き、人のため、世の中のために生きぬいた義民の心を歌に残しました。

「人のため 身は罪つみ咎とがに 近江路おうみじを
別れて急ぐ 死出しでの旅立ち」